

レファレンス・コーナー -- 躍進するインドを知る (ブックシェルフ)

著者	高木 敏朗
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	138
ページ	63-63
発行年	2007-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005295

レファレンス

コーナー

躍進するインドを

知る

高木敏朗

インド経済が躍進を続けている。それに大きく貢献しているのがソフトウェア産業で、最大の輸出産業となっている。当研究所が先に実施したアンケート調査では、当研究所に要望する研究対象地域は中国について、インドが二位であった。二〇〇六年二月にはカマル・ナート商工大臣を招いて、ジェトロなどが共催した大規模なインド投資セミナーが開催されるなどインドへの関心は高まりを見せている。

ジェトロは、インド経済事情を、現地事務所を通して収集し、ホームページ (<http://www.dtr.go.jp/>) で詳細に報告している。セミナーや展示会などのイベント情報、政治経済の動向、貿易為替制度、投資制度、各種統計などがある。毎日ムック『中国・インド企業データ二〇〇六—二〇〇七』(新華ファイナンスジャパン・毎日新聞社 二〇〇六年) には、中国企業に比べれば数は少ないがインド企業の株式情報が掲載されてい

る。

プラナブ・バルダン著・近藤則夫訳『インドの政治経済学』(勁草書房 二〇〇〇年) は、インド経済が躍進を開始する前の停滞している原因を政治的要因に求めている。大工業資本家階級、富農階級、知的専門家階級(公共部門の官僚)が独自に利益を追求したため、公的資本投下が小さく、有効な資本形成ができなことが工業化の障害になったと分析する。そのインド政治経済がどのようにして変化したのであろうか。内川秀二編『躍進するインド経済—光と陰』(アジア経済研究所 二〇〇六年) は、一九九一—一九九二年度から二〇〇三—二〇〇四年度までの平均GDP成長率が五・九%と安定した経済成長を続けるインドの社会的経済的構造を明らかにし、一九九一年からスタートした経済自由化が鉄鋼業、製薬産業、自動車産業、小規模工業、情報技術産業に及ぼした影響を挙げている。小島眞著『インドのソフトウェア産業』(東洋経済新報社 二〇〇四年) は次のように分析している。中国が『世界の工場』であるとするならば、インドは『世界のITサービス・センター』としての地位を築いた。それはハードウェアでなくソフトウェアでかなりの発展ができる新しい開発モデルである。留学、海外勤務、移民など海外で活躍するIT専門家のネットワークが米国内企業と結び付き、ソフトウェア産業を開花させたのである。榎原英資

・吉越哲雄著『榎原英資 インド巨大市場を読みとく』(東洋経済新報社 二〇〇五年) は、インドはITサービスの輸出国の段階から内需大国への道を歩み始めたようだとし、中国や東アジアと比べながら、日本企業がインドに傾斜していく必要性を説いている。島田卓著『巨大市場インドのすべて』(ダイヤモンド社 二〇〇五年) も、人口一〇億人のうち中間・富裕層は三億人で、日本や米国の人口を上回る規模に拡大している、その巨大さを説いている。

さらに経済最前線の一翼を担う日本企業の事例や成功する法、州別の事情にも言及している。ステイーヴン・フィリップ・コーエン著・堀本武巧訳『アメリカはなぜインドに注目するのか』(明石書店 二〇〇三年) は、核保有国でありハイテク革命のインドが主要国となりつつあり、その変化がアメリカにとつてどのような意味合いをもつかを、アメリカの視点から検証する。

こうしたインドの経済成長の側面だけに眼を奪われるのではなく、都市生活の現状とニュー・リッチ層を生活に即して見ていこうとするのが、中島岳志著『インドの時代』(新潮社 二〇〇六年) で、グローバル文化と宗教の混在を写真入りで紹介する。ジョアンナ・リドル、ラーマ・ジョーシ著・重松伸司監訳『インドのジエンダー・カースト・階級』(明石書店 一九九六年) も、市場経済化に伴ってカースト社会から階級社会

になるにつれて、女性の地位はどのような影響を受けたかをインタビューを中心に分析し、特に教育を受けた有職女性の新しい中間層に焦点を当てて描いている。カーストとは何であるかを文化人類学の視点から考察するのが、杉本星子著『女神の村』(民族史) (風響社 二〇〇六年) である。ヒンドゥー教徒は父系出自という生まれによって特定のカーストに所属する。カーストの名称や起源伝承、職掌はインド社会における身体化した文化資産である。その社会的ネットワークは社会関係資本で、経済資本と同様に戦略的に投資されると分析している。このようなインド国内の多様な集団の欲求が複合的に重なり合いながらヒンドゥー・ナシヨナリズム運動が展開されているとして、末端の民衆の生活戦略や運動の具体的な活動の場に注目したのが、中島岳志著『ナシヨナリズムと宗教』(春風社 二〇〇五年) である。

躍進する経済、インド社会の基層をなすカーストとヒンドゥーを中心に紹介したが、最後に、松本脩作編著『インド書誌 明治初期—二〇〇〇年刊行邦文単行書』(足立享祐編著『明治・大正・昭和期南アジア研究雑誌記事索引』(書誌、索引ともに、東京外国語大学大学院地域文化研究科 二〇〇六年) にふれておきたい。両者は、ともにインドを知る上で有用な手がかりを与えてくれる。

(たかぎ としろう／アジア経済研究所図書館)